

弘法さんかわら版

発行編集部
大塚耕平事務所
☎052-757-1955
kouhei@oh-kouhei.org



十二月になりました。冬本番です。くれぐれもご自愛ください。

一昨年「尾張名古屋・歴史街道を行く―杜寺城郭・幕末史―」をお送りしていますが、今年「名古屋城と名古屋城下町」をお送りしています。今月は最終回、**名古屋五口と名古屋商人**です。

★名古屋五口と脇街道

戦国時代の**那古野**の中心であった**今市場**、**中市場**、**下市場**を取り囲むかたちで名古屋城下町が築かれました。

そして、名古屋城と宮宿を結ぶ**基盤割**の南北の要路**本町通**と東西の要路**京町筋**と**伝馬町筋**。南北の本町通と東西の伝馬町筋の交差点が高札が掲げられる「**札の辻**」です。

城下町外縁には、**志水口**、**大曾根口**、**三河口**(**岡崎口**)、**熱田口**、**枇杷島口**の「**名古屋五口**」があり、脇街道につながります。

「**札の辻**」から**伝馬町筋**を東に進むと**東寺町**の南側を抜けて**三河口**に着きます。三河口から**駿河街道**、**飯田街道**につながり、**拳母街道**や**岡崎**

街道に枝分かれしていきます。

「**札の辻**」から本町通を南に下り、**橋町大木戸**を過ぎて**金山神社**辺りから西に折れると**佐屋街道**です。本町通をさらに南下すると**熱田口**から**東海道**に入ります。

「**札の辻**」から本町通を北上、外堀の手前で**京町筋**を西に進み、堀川沿いに北上すると城下町境界である**樽屋町大木戸**に着きます。大木戸を抜けてさらに進むと**枇杷島口**、**枇杷島橋**で庄内川渡ると**美濃街道**です。

美濃街道は**熱田**が始点。東海道を東から進んでくると、**熱田**手前で**美濃街道**との分岐点に遭遇。そこから北上すると本町通につながり、城下のいづれかの筋を西に進み、堀川に着いたら川沿いに北上し、**樽屋町大木戸**に向かうのが**美濃街道**です。

京町筋を東に行き、城郭の東端を北に折れると**上街道**(**木曾街道**)に入ります。城の東大手門前の**清水口**を通って**志水口**に至り、そこから小牧宿に向かいます。

建中寺に至る手前の**佐野屋辻**から北に折れて進むと**赤塚町大木戸**です。ここも城下の境界であり、その先は**下街道**(**善光寺街道**)であり、**大曾根口**につながります。

東海道は幕府直営の**五街道**のひとつであり、**佐屋街道**と**美濃街道**はその附属街道。美濃街道は東海道と中山道の接続路です。
上街道(**木曾街道**)や**岡崎街道**は尾張藩の藩道です。名古屋城下から

周辺地域への接続路であり、城下町中心部から放射状に延びるか、あるいは外縁部から街道が始まるように整備されました。

★広小路と四間道

道路網の整備によって城下町を人々が往来し、城下町は発展。人口が増え、町家が密集し、大火に見舞われることもありました。

万治の大火(一六六〇年)は京橋筋の北を通る外堀沿いの片端筋と伏見町通の角付近から出火し、武家屋敷百十二軒、町屋二千二百二十八軒を焼失しました。

その頃、城下町は**碁盤割**から外にも拡大しつつあったことから、以後の火災時の延焼を防ぐために、碁盤割南端の**堀切筋**の**長者町通**から**久屋町通**までの道幅がそれまでの三間から十三間(約二十四メートル)に拡張されました。後にその区間は**広小路**と呼ばれるようになります。

また、火災直後の寛文年間(一六六一〜七三年)に尾張藩の命により**火消六組**が組織され、十七世紀末には八組千四百五十人の規模になっていました。

しかし一七〇〇年、再び大火に見舞われ、千六百四十軒余を焼失。火災後に堀川端の裏道が二間から四間に拡張され、**四間道**と呼ばれるようになります。

★三家衆・除地衆・十人衆

度重なる火災にも屈せず、名古屋城下町は発展を続けます。名古屋城下町に根付いた町人は、大きくは三つに分けられます。ひとつは、**清洲越し**に伴って名古屋に移って来た町人です。**伊藤次郎左衛門**な

どが典型です。もうひとつは、藩祖義直が駿府から名古屋入りする際に同行した**駿府越し**の町人です。本町の菓子屋**桔梗屋**又**兵衛**、上七間町の紺屋**小坂井新左衛門**などです。

清洲越し、駿府越しのいづれにも関係ない町人たちが三つめです。寛文年間に美濃から来て金物商として地盤を築いた**岡谷家**、知多郡内海村出身で享保年間(一七一六〜三六年)に納屋町で米屋を始め豪商になった**内田家**、春日井郡小本村から城下に来て質商で成功し、天明年間(一七八一〜八九九年)には町奉行から米仲買人支配に任じられた**関戸家**などです。

尾張藩御用達商人は**三家衆**の**伊藤家**、**関戸家**、**内田家**を頂点に、**除地衆**、**十人衆**と格付されました。豪商、豪農は**熱田**沖干潟で**新田開**発も盛んに行い、財を成しました。新田持豪長者として知られたのが**海西郡の神野金之助**です。

金之助の長兄**友三郎**は碁盤割の外縁部、**広小路**南入江町の小間物屋**紅葉屋**に養子入りし、三代目**富田重助**を襲名。商才を発揮して舶来輸入品の洋物屋として成功し過ぎたため、幕末、尊攘派藩士**尾張藩金鉄組**の襲撃を受けた**紅葉屋事件**が起きました。

★来年からは

山門に置かせていただきます

今年名古屋城と名古屋城下町をお送りしました。

長い間ご愛顧いただきありがとうございます。かわら版ですが、来年からは**山門に置かせていただきます**ので、ご自由にお取りください。皆様、よい年をお迎えください。

